等松・青木監査法人

事務所報

当監査法人の基本構想

等松　農夫蔵

一、当監査法人は、将来に対するヴイジョンを抱き、高遠な理想の上に結成された。

高遠な理想とは何か。それは他国に遅れてわが国に移入された公認会計士の制度をその主旨に沿つて発展させ、公認会計士の職能を完全に発揮して社会的信望と依存度を高めるための先駆者たる役割の一端を担い、更にそれを国際的にまで推し進めることである。

二、この理想を達成するためには、個我を脱却して大乗に附くの犠牲的精神が基本となつている。

当法人の結成に当つては、各社員は目前にチラツク利害得失に捉われることなく、この理想に向つて、相当の犠牲も覚悟して踏み切り、これに従つた職員諸士もまた同じ覚悟を固めたのである。まさにこれはメイフラワー船上の盟約にも誓（たと）うべきものである。監査法人を造らなければ、時代に取り残されるとか、クライエントを失うとか、そんな低俗なものが動機では決して在り得ないのである。

三、結束と統一とは欠くことのできない絶対要件である。

このような盟約の上に結ばれた同志は統一された固い結束をなすべきは当然のことである。

固い結束とは、お互の間に、共通目標の一致と、それに向つての積極的努力とがあり、長短相補ない手を携（たづさ）えて進歩向上を図ることである。意志の疎通によつて不平不満を解消することである。

他を陥れて自分だけよい顔をするとか、他の欠陥をあざわらうのみで是正向上させるだけの親切心のないような、浅ましい心情は一切なげうつて、謙譲と協力の基本精神が恒に横溢（おういつ）していなければならない。辭（ひがみ）とか、妬（ねたみ）とか、諦（あきらめ）とかいうような、しみつたれ魂性は一切かなぐり捨てることが肝心である。

四、努力研鑽を積むことは、生涯の努めである。

公認会計士には、その専門業務がある。その専門業務は社会環境と経済情勢の推移とに伴つて、瞬時も止めることなく進化して行く。従つて、公認会計士の知識技能はこの進化に遅れることは許されない。むしろ、これに魁（さきが）けて指導的立場に立たなければならない。そのためには、常時社会の実態を把握認識し、単に会計経理とか、監査技術とかの専門部門に止らず、更に更に広く学び、かつ知ることが必要である。当監査法人としては、この面に充分意を用いなければならない。

五、人間的信望を高めることが何よりも肝要である。

公認会計士の最終の価値判断は、その人格とか、人間性にあること勿論、専門的知識技能は絶対的要件ではあるが、それだけでは公認会計士に対する評価は決して高くならない。この人間形成を如何にして達成するか、しかも、それを集団として。それは社員とは言はず、職員と言はず、全社自から心掛けることであるが、監査法人内部の環境なり雰囲気なりが、この目標に向つて造り上げられることが大切である。そして全員がその環境や雰囲気に浸りながら努力修練する以外にはない。

六、監査法人を全員の永遠の拠点ならしめることが終局的には監査法人の理想達成のための唯一の途である。

以上、述べてきたところを要約して行くと、監査法人の理想の達成は、監査法人を構成する社員および職員の全員がよくその使命を自覚して努力精進するか否かにかかつている。しかるば、この監査法人をして全員の安住の場所として、各員がその全知全能を伸ばして満足して活動し、将来を託し得るものたらしめなければならない。

監査法人発足の経緯からも判断し得る通り、この監査法人が特定小数者の私物でもなく、また小数の意思で将来が左右されるものでもないことは明らかである。従つて、今から後の命題は創立時からの者と、その後に参加された者とは問はず、仮りにもここに一蓮託生のグループに加わつた以上は、共に共に手を携えて、その理想達成に向つて、それぞれの特長や専門を生かしつつ全力を傾け、発展に発展を重ね国内的にも、国際的にも、信頼度の高い監査法人を造り上げ、その餘恵に各員が浴するようにしなければならない。これが当監査法人の基本的構想である。

ヴイジョンとその完成への途

小池　兼五郎

私は昭和三十年に、長崎県佐世保市の郊外に、太平洋戦争戦歿者の慰霊塔を建立したことがある。二百米位の快好のいい小山の麓から約五〇米位の高さの斜面の所を六百平米位きりひらいて、そこに高さ十一米の大きい塔を建てたのである。設計者は東京芸術大学教授吉田五十八先生である。先生は、芸術院会員であり、文化勲章受賞者であり、築地の歌舞伎座の設計者でもある。そのときのことであるが、私の建立の趣意をきかれ、現物視察を済まされて帰京された先生は、二ヵ月位経つて、私に塔の姿図を示され、「これでどうです」と云はれた。その姿図は、小山を背景に、塔全体の姿を描き、その前面に拝装の娘さんを立たせたものであつたが、私は、アッと驚いた。塔の形から結構から、何からなにまで、これまで見たこともないものであつたからである。五分程して、先生から、いろいろご説明があつた。ご説明を承はつてあれこれ考えている内に、私の眼も豁然と開けた。私は直ちに建立関係者数千人を代表して、一切おまかせ申し上げる旨、お答えした。塔に関するヴイジョンは、正しく私共の考えを遙かに超絶したものであつたのだが、それからさきの建設事業は、また、中々大変であつた。最も苦しんだのは、予算のやりくりと建設業者の選定とであつた。私は先生のご意向を体し塾慮の末、建設業者を、主要部分建設については東京一流業者をその他の部分については地元業者を指定するようにアレンヂした。ところが地元業者と市民有志から猛烈な反対運動を受けるに至つた。そして挙句の果には、市長が代議士陳情に上京する、業者代表が東京の先生の下に談判にいくという事態にまで立至つた。事前に、こうした運動のおこることを予期しないではなかつた、私ふこうした猛反対に遭つては少なからず弱つたのであるが、粘りに粘り、忍に忍、妥協すべきを妥協して、何とか難局を切りぬけることができた。

さて、主要材料の加工ができて、先生指導の下に、塔の組立と背後の庭園の造築が行なわれていつたが、見る見るうちに、立派な塔と植込と白砂をまかれた前庭とができ上つて見ると面目が一新した。そして庭園の両端から、薄いバラ色の電光が、塔の白い部分を照射すると、慰霊前夜祭に相応しい光景がそこに浮び上つて、思わず、私は頭を低く垂れた。

ここで私は話を等松・青木監査法人のことに移そう。

今当法人は、今後の発展を目ざして、一つのヴイジョンを創りつつある。それは中々重要なことで、また、むずかしいことである。もし私は、これを実現させていくこれからさきの仕事は、なお一層重要で、なお一層むずかしいことと考える。それには、どうしたらよいか。私は秘かに考える。もつと一層過去と現実とを見詰めて、各々の人がフランクリーに話し合いヴイジョン完成の途を見付け出そうではないかと。